

てんかん と 性

弘前大学医学部 保健学科
和田 一丸

五、てんかん女性の出産

てんかん患者の出産率の低さを指摘した報告がいくつかみられています。海外のある報告では、女性てんかん患者の出産率は八十五%と、期待値を下回る数値であったとしています。また、部分てんかんおよび十歳未満の早期発症例が、全般てんかん、十歳以後発症例と比べて、出産率が低いとする報告もあります。てんかん女性の出産率の低さには、月経異常や性欲低下との関連が指摘され、これには一部の抗てんかん薬の影響も推定されます。また、

てんかんの遺伝性や妊娠中の奇形発現に対する危惧が関与している場合もあると推測されます。

次に、てんかん女性の分娩について触れます。てんかん妊婦における児の周産期死亡は一般の妊婦に比べて多いとする報告があります。一方、てんかん妊婦と対照妊婦との間に在胎週数に差はないとする報告が多くみられます。胎盤異常に関しては、胎盤早期剥離がてんかん妊婦では対照よりも多いとする報告と、そうではないとする報告があり、見解は分かれています。てんかん妊婦における分娩時合併症としての前期破水や臍帯異常に関する報告は、これまでほとんどみられておらず、てんかんをもついても多くの場合は、通常の出産が可能であることを認識すべきです。なお、母体の抗てんかん薬治療に起因する新生児出血に対しては、ビタミンKの予防的投与が有効です。

六、てんかんの遺伝性

てんかん発症率は二十歳までの一般人口では約1%で、母親がてんかんで

あれば、その子どもの八〜九%がてんかんになる可能性があり、父親がてんかんの場合には、子どもの二〜三%にてんかんが発症するとされています。母親がてんかんの場合には息子より娘に多く発症すると報告されています。子どもが十五歳以前にてんかんを発症した時には、その同胞が二十歳までにてんかんを発病する危険性は三〜五%になり、二十五歳以降に発病した時にはその頻度は3%ほどに低下すると言われています。日本の一般人口の熱性けいれん有病率は約8%で、同胞における熱性けいれんの頻度は二〇〜二十五%になります。てんかんと熱性けいれんの素因は異なるものと考えられますが、いずれはそれぞれの責任遺伝子が判明することが期待されています。なお、常染色体優性夜間性前頭葉てんかん、良性家族性新生児けいれん、若年ミオクロニーてんかんなどの原因遺伝子の染色体上の候補領域がここ数年間で次々に明らかになるなど、この分野の研究が急速に進歩していることを付け加えます。